

# 教科書について

「楽しく学べて、コミュニケーション力が付く教科書」を求めて

考えてみませんか？

皆さんはこれまで、どんな教科書に出会い、  
どんな「付き合い方」をしてみましたか。

長年、既存の教科書について疑問を持ちながら考え、  
試行錯誤を重ねた現場の教師たちから「できる日本語」という  
新しい教科書が生まれました。その壮大な作業の過程で  
教師が学んだこと、考えたことを、皆さんと  
共有していきたいと思えます。

第6回

## 「プロフィシエンシー」で、 教師力アップ！ 1

### まずは「プロフィシエンシー」を 理解しよう！

「プロフィシエンシー」という言葉は、聞きなれない人が多いかもしれません。しかし、学習者のコミュニケーション力を付ける授業を考える際には、とても大切な言葉です。『プロフィシエンシーを育てる』(2008、凡人社)にある「用語集」には、「プロフィシエンシー」を次のように説明しています。

あらかじめ 予め定められた学習範囲をどれほど達成したかをみる「アチーブメント」(達成度測定)と対立的に用いられ、特定の学習カリキュラムなどとは独立した能力(実力)を意味する。

ですから、よく使われる「アチーブメント・テスト」は到達度(達成度)テスト、「プロフィシエンシー・テスト」は熟達度テスト・実力テストということになります。「用語集」ではさらに、「言語の運用能力促進を目的とする語学教育においては、実際生活上の言語活動において、どのようなことがどれほどできるか、を問う、いわゆる、can-do-statementsの核になる概念である」とあります。つまり、「プロフィシエンシー」とは、「その言語で、どんなことがどのようにできるかを考えるときに、『できること』を束で捉

え、それを示す熟達度」だといえます。

この「プロフィシエンシー」を明確に記述しているものに、OPI(Oral Proficiency Interview = 口頭能力インタビュー試験)があります。これは、アメリカにあるACTFL(全米外国語教育協会)が開発した汎言語的な(どの言語にも使える)会話試験です。初級、中級、上級、超級の4つのレベルが設定され、各レベルでできることを明確に記述しています。ここで、ごく一部ですが、上級と超級の特徴を紹介します。

上級：主な時制の枠組みの中で、叙述したり、描写したりすることができ、予期していなかった複雑な状況に効果的に対応できる。

超級：いろいろな話題について広範囲に議論したり、意見を裏付けたり、仮説を立てたり、言語的に不慣れな状況に対応したりすることができる。

### 学習者の言語能力を 「タテ軸」で捉える

では、プロフィシエンシー重視の教科書を使うことで、教師力はどうアップするのでしょうか。一つには、学習者の言語能力を「タテ軸」で捉えることができますようになります。

「タテ軸」で言語能力を捉えるとは、

# 学習者の力を伸ばす秘薬は「達成感」!

日本語の力を全体として見るのですが、この力をしっかり身に付けている教師はそう多くありません。現実には「初級のこの課で学ぶ項目はこれ。次の課ではこれを……」「初級では文をしっかり。中級になったら段落の勉強を……」などと、平面的に考える教師が多いようです。

特に「はじめに文型ありき」で授業実践をしている場合は、どうしても「文型がしっかり定着したか」にばかり目が行ってしまいます。ぜひ、軸を「文型」から「プロフィシェンシー」に切り替え、言語能力を「タテ軸」で捉えながら、タスク重視の授業を行ってください。

最も望ましい形としては、教科書自体が「プロフィシェンシー重視」になっていることですが、どんな教科書でも、教師自身の意識を変えるだけで、授業は大きく変わってきます。例えば、「自己紹介」というタスクを考えてみましょう。

初級スタート時にできるのは、限られた人との間での自己紹介であり、名前・国・趣味などが言えるにとどまります。

しかし、初級後半になると、より詳しく、趣味や自分の生活について話すことで、人との関係づくりを目指した自己紹介をすることができます。

さらに中級では、人の輪も広がり、日本語を使って多様な人々との交流を深めることを目指します。そこで、「自己紹介」というタスクも、将来の目標を述べたり、自分自身の性格について語ったりすることができると、難易度も上がってきます。

このように「タテ軸」でタスクを考え、教育実践を行うことで、言語能力について、包括性、一貫性、明示性のある捉え方ができるようになり、それが教師力アップにつながります。「プロフィシェンシー」重視で、しっかりタテ軸で考えられる教師を目指していきたいものです。

夕方の教員室は、クラスの学習者の話で盛り上がっています。突然、A先生が懺悔(?)を始めました。

「私、“can-do”が大切って言いながら、いつも口から出るのは“cannot-do”ばかり。陳さんは論理的に話せないとか、朴さんは段落で話せないとか……」

それを聞いた新人のB先生。

「私は、まだ駆け出しなんで、せめて学習者に達成感を持ってもらいたいと思って……。だから、初級1課の「自己紹介」をCDに録音しておくんです。あっ、ビデオを撮ったこともあります。それで、初中級の1課「新しい一歩」をやる時に聞いてもらおうと、みんな『へえ、今はこんなにうまく話せるんだ!』って、学習者は自分で自分に感動しているんです」

「達成感を感じること」がとても大切なことを、改めて確認し合った“対話タイム”でした。



## 嶋田和子

イーストウエスト日本語学校副校長。  
外資系銀行勤務の後、専業主婦を経て日本語教師。  
現在は、日本語教育業界を牽引するベテランの一人として、学習者への日本語教育はもちろん、教師養成にも当たる。  
著書に『目指せ、日本語教師力アップ! —— OPIでいきいき授業』(ひつじ書房)、『キムチと味噌汁—韓日、異文化交流のススメ』(教育評論社)、『ワイワイガヤガヤ 教師の目、留学生の声——異文化交流の現場から』(教育評論社)など、多数。  
『できる日本語』(アルク)監修

- 連載ラインナップ
- 第1回 教科書を考えるって面白い!
  - 第2回 どんな教科書と付き合ってますか?
  - 第3回 タスク先行型授業にチャレンジ!
  - 第4回 「わかる」から「できる」へ
  - 第5回 漢字学習も「できること」重視!
  - 第7回 「プロフィシェンシー」で、教師力アップ! 2
  - 第8回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 1
  - 第9回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 2
  - 第10回 自律的な学びを支えるモノ
  - 第11回 「学習者が話したくなる」教科書とは?
  - 第12回 対話で新たな日本語教師人生を!